

## 令和5年度第1回練馬区幼保小連携推進協議会 要点録

開催日時	令和5年9月4日(月) 午後3時30分～午後5時	
会場	練馬区役所本庁舎19階 1905 会議室	
出席者	会長	教育振興部長
	委員	田中泰行、桑田則行、篠原直子、鈴木康予、横田寿子、内木勉、関口和幸、山本浩司(敬称略)
	事務局	教育施策課長、学務課長、こども施策企画課長、保育課長、教育指導課指導主事
傍聴者	なし	
案件	(1) 令和5年度練馬区幼保小連携研修会の実施報告について (2) 「(仮称) 練馬区幼保小連携推進方針〔素案〕」に寄せられた意見と区の考え方について (3) 「(仮称) 練馬区幼保小連携推進方針〔案〕」について (4) その他	

### 事務局

これより令和5年度第1回練馬区幼保小連携推進協議会を開催します。  
今年度初めての協議会ですので、委員の皆様にご自己紹介をお願いします。

<各委員自己紹介>

### 事務局

それでは、次第に沿って進めます。  
案件(1) 令和5年度練馬区幼保小連携研修会の実施報告について説明をいたします。

<事務局 案件(1)について説明>

実施報告について、また、研修の講師やテーマ等について委員の皆様から何かご意見等あればお願いします。

(特になし)

今回の研修の内容やこういうものがあつたほうが良いなど、後ほどお気づきの点がありましたら、随時教えていただきたいと思います。

では、次の案件に進めます。案件(2) 「(仮称) 練馬区幼保小連携推進方針〔素案〕」に寄せられた意見と区の考え方について(以下「寄せられた意見と区の考え方について」といいます。)です。資料2をご覧ください。

<事務局 案件(2)について説明>

会長

事務局から「寄せられた意見と区の考え方について」説明が一通りありました。ご意見、ご質問があればお願いいたします。

(特になし)

会長

確認になりますが、「寄せられた意見と区の考え方について」5ページ9番です。「目的が感じられないイメージ図」という意見を頂いています。これの対応区分が「○」で、素案の趣旨は掲載していますという分類にしています。この考え方についても一度説明をお願いします。

事務局

(仮称)練馬区幼保小連携推進方針〔案〕と記載している資料、11ページを御覧ください。これが、今ご質問のあった、幼保小連携の全体イメージです。真ん中に「子ども」があり、「家庭」があり、それを取り巻く関わり、全体の環境ということでイメージ図を作っており、子どもや家庭と関わる多種多様な存在を表す意図を持って全体のイメージとして示しています。そういった言葉を既に推進方針の中でも記載をしておりますので、区分は、素案に趣旨を掲載しているもので「○」をつけさせていただきました。

会長

意見としては、「もう少し大枠から俯瞰しイメージに落とすことで理解が進むのではないか」ということですが、1つ1つの取組を書くのではなく、俯瞰した全体像をここで表現していますということで良いですか。

事務局

はい。事務局はそういう意図を持って記載しました。

会長

ほかにいかがでしょうか。

委員

「寄せられた意見と区の考え方について」4ページ5番については、先ほどの説明の中で、平成29年には低年齢の不登校が10人だったのが、令和3年の統計では25人になっていた。令和3年というのはコロナ禍に入ったばかりのときですね。令和4年、5年と経ってきて、まだ正確な数はいないでしょうけれども、大変気になります。小学校の校長先生、印象で結構ですが、これは増えているとか増えていないとか、どのように感じていますか。

#### 委員

要因が何かというのが非常に難しい部分があるのですが、コロナの影響で在宅期間が長くなって、それから保護者の在宅が多くなり、子離れ、親離れができない事例が多くなっています。不登校そのものよりは、登校渋りの傾向はかなり強くなっているかなというところがあります。それから、保護者が家にいる時間が長いので、子どもたちに何かあったとき、相談しやすいなと感じています。

今年コロナが5類になって大分変わってきているのですが、昔に比べると子どもたち自身の耐性という部分が非常に落ちているのではないかと思います。それが、子どもたちの変質なのか、コロナの影響なのか、いろいろな学校教育そのものの課題なのか、原因はちょっとはつきりしないので、何とも言えないところではあります。

#### 委員

これは厳密に境目をつけられないでしょうけれども、完全なる不登校と、それから登校渋りとの境目とか、その辺が気になります。

今年の新聞記事なのですけれども、調査によるとコロナの後、5歳児の社会性が少し減退していると言いますか、コロナ前に比べて、社会性の発達に少し遅れが出ているのではないかという記事がありました。私は自分の幼稚園ではそういうことを全く感じていないのですが、保育園ではいかがですか。

#### 委員

あまりそういうことは感じません。むしろ親の働き方が、いろいろな方法に広がりましたから、そういう家庭の環境という意味では、先ほど校長先生がおっしゃったように、在宅で仕事をしているご両親がいたりすると、子どもがもっと家にいたいとかあるかもしれません。それこそ寝る時間が遅くなって寝不足の傾向にあるというのはあるかもしれませんが、子ども自体は、園で見ている感じでは、そんなに目立って社会性が欠けているとは思いません。

#### 委員

区立幼稚園は、全体の園児数が減っていたり、その中で特別な支援が必要なお子さんの割合がすごく高くなってきたり、いろいろな要因があるので、コロナ禍の影響なのか、それ以外の要因なのかはつかみにくいです。来年度入ってくる子どもたちが、幼い頃からマスクをしている。コロナに関わっている年代の子たちがだんだん増えてくるので、乳幼児期のマスクの影響とかはやはり何かあるのかと、個人的には思います。現場では特に、先生がおっしゃっていたように、大きな違いは感じていません。

#### 委員

保育所の場合にはちょっと生活に乱れが出てくるかもしれませんが、幼稚園に関する、保護者との接触時間が長くなったということで、これが1つプラスでもあるのではないかという気がします。やはり未曾有の3年間でしたから、これからこうしたことは本当に注意深く見ていかなくてははいけないし、特に小学校の場合には学習に差し支えが出てくるのではないかという恐れはあるのですよね。ぜひこれについては、今後ともしっかりと見ていただきたい

と思っています。

**委員**

区立保育園でも、コロナ禍の前後の違いはあまり大きく感じないかなと、皆さんと同じ印象を持っています。

それと、保護者の勤務形態で、在宅ワークは確かにすごく増え、その後、どちらかという、勤務時間も少し短くなってきて、長くいる傾向のお子さんも減っています。そして、特段コロナ禍が明けたからといって、元のように保育時間が長くは戻っていないように思います。

何か調査をしたわけではないのですが、何が変わってきたかという、勤務の形態、それから、メディア依存度は年々高くなってきている傾向を感じます。

**会長**

コロナがこの5月に5類になったばかりなので、もうちょっと経ってから影響が出てこないとも限らないかなと思いますので、その辺の動向は注視していければと思います。

**委員**

方向は違うのですが、今年の夏の猛暑で7月、8月の2か月、子どもたちは外遊びができないう状況でした。環境省の暑さ指数を見ていると、警報、危ない状態だということで外に子どもたちを出せない。そういう意味での、社会性ではないのですけれども運動能力の低下は、これから問題になるのではないかなと思います。

20年前に比べると、走るとかボールを投げるとかジャンプするとか、そういういろいろな能力が非常に落ちているような気がします。そればかりが原因ではないのかも分かりませんが、やはり川遊びだとか海での事故というのは多くて、体を使って体験できる環境が、特に今年は著しく低下しているのではないかと思います。それが、将来的には子どもの身が危険にさらされる要因にもなるのではないかと心配しています。

**委員**

「寄せられた意見と区の考え方について」4ページ5番で、区民の方はデータを挙げるようにというご意見です。(仮称)練馬区幼保小連携推進方針〔案〕3ページの下に※印の4について、いろいろな要因が複合的に入っているとしたら、ここで幼保小の連携が、幼児期から小学校に上がるころの段差があることによって小1の不登校の児童数が増加傾向にありますと、直結して書いてしまうのはちょっと危険なのかなと、先生のお話を伺って思いました。具体的に書くようにということに対してのお答えではあったのかもしれないですけど、このデータを簡単に「今、増えていますよ」と言ってしまっているのかなと私もちょっと感じます。ご意見に対しての答えではあるにしても、データの示し方に根拠があるのかなと私も感じました。

**会長**

事務局、いかがでしょうか。

**事務局**

案件(3)につながる内容なので、資料3の説明をさせていただきたいと思います。

**会長**

では事務局、説明をお願いします。

<事務局 案件(3)について説明>

**会長**

何かご質問、ご意見があればお願いいたします。

**委員**

(仮称)練馬区幼保小連携推進方針〔案〕3ページ6行目の記載についてです。「小学校入学当初の子どもが、学習・生活環境の変化に戸惑いや不安を感じ」というのはそうなのですが、その後「小学校になじめず」という言葉が、非常に小学校としては重い表現になっています。私たちが感じているのは、学習環境だとか生活環境が大きく変わったことになじていないところ、それ自体が小学校生活だと思っているので、小学校そのものが課題と捉えられるかなというのがまず1点です。

それから、小学校1年生における不登校の児童数、それから下の注釈のところもそうなのですが、不登校という部分に関しては、どこまでが不登校というくりもあるのですが、私の個人的な考えの中では、三角形の一番上が不登校なのです。その下に登校渋りがあり、さらには集団不適應だったりします。今、学校が一番苦しんでいるのは、その集団不適應で、それから登校渋り傾向という児童が非常に増えていて、その一番結論的な部分が不登校という部分で、その一番度合いの重いものだけを出してしまう、不登校児童というところだけの増加で捉えてしまうというのが、僕個人としては少しきついと思います。集団になじていない児童が増えているというのは当たり前のことです。皆様が感じていることなのですが、この1年生の不登校児童の増加というところで限定して書いてしまうと、ちょっと学校現場としては厳しいと思います。

**委員**

私も、これに関しては、同じことを思いました。要は、段差があることが不安で、近年の低学年での不登校の増加となると、それはちょっとどうなのかなと思います。段差というのはこれまでもあって、むしろ逆に段差を埋めよう埋めようと、スタートカリキュラムの導入とか取り組んできている中で、それでも低学年では不登校が増えているというのは、単にこの段差だけの話ではないのだろうと思います。不登校は小学校の高学年でも、中学生でも、全ての学年において増えているので、その要因は別のところにも多くあると思います。段差があることで、小学校1年生の不登校の数が10人から25人に増えたとなってしまうと厳しいと思います。

**会長**

この件に関して、ほかの委員の方、いかがでしょうか。

**委員**

幼稚園の子どもの年長組を見ていると、段差を超えることにむしろ誇りを持っている子どもはかなり多いのです。小学生になった子どもたちが幼稚園に遊びに来て、「君たちはいいよな。勉強をしなくていいのだから」と言いながら、実は非常に俺たちは勉強しているのだぞと、その誇りを高らかにしているところがあります。ですから、「段差」というよりも、何かほかの要因のほうがずっと多いのではないかと、むしろ、段差を縮めることにあまり腐心しすぎないほうがいいのではないかなというところを感じます。非常に難しい問題だと思います。

**会長**

この「小学校になじめず」という表現は、国か何かの記載の引用ですか。

**事務局**

この推進方針の記載内容については、言葉の使い方を配慮したり、考えたり、丁寧にするというやり方が必要と思っています。私も何の根拠もなく書くのはなかなか難しいので、この架け橋特別委員会での言い回しやエッセンスを使いながら記載をしています。

不登校児童は本当に低学年のみならず全学年に多くなっています。これは練馬区だけではなくて全国的な傾向として事実です。練馬区は不登校に関する実態調査で、不登校状況にある子どもや、以前、不登校だった生徒さんにご協力を頂いて、その生徒さんにどういうところが要因か聞いています。いろいろな要素があって人それぞれだというのがあれば、いろいろな環境が複合的に重なり合っただけでなかなか登校できなかった、それが不登校の長期化につながってしまったというお子さんもいらっしゃると思います。今、委員の皆様からのご意見を伺う中で、短絡的に結びつけるものではないですということの断り書きという言い方は変ですが、私たちもこういうふうを考えている、捉えているけれども、不登校の数が増えていることも看過できないというところを工夫しなければいけないと思いました。

**会長**

分かりました。

**委員**

(仮称) 練馬区幼保小連携推進方針〔案〕 11ページに「幼児期の育ちと学びを小学校の学習につなげる」という文章がありますけれども、幼児期の学びというのは、すごく楽しかったから学ぶ、あるいは逆に自分のやったことが何かすごく周りに対して影響がありすぎたので学ぶ、あるいは友だちから何かされて学ぶとか、そういったような学びが「学び」であって、それが小学校の学習とは質が違うのです。大変違うので、私どもの幼稚園でも、小学校に行って登校渋りをした子の話を聞いていると、「何でみんな同じことを勉強しなくてはいけないのだろう」とか、その子はいろいろところでいろいろなことを学んできたのだけれども、学習に対しては、何かすごく違和感を持ってしまっている。

これは、今の世の中にあるいろいろなことが、すごくいろいろな形で影響しているのではないかと思うのです。例えば、教育が十分でない開発途上国の子どもたちは、むしろ学校に行きたくてしょうがない。いけない子どもたちはものすごく学校に行きたがる。そういう状況と正反対の社会になってきているのではないだろうか。やはり学びの質の違いというのをしっかりと認識していかななくてはいけないという気がします。

#### 委員

遊びの中で学びを深めるというのは、保育園では今も盛んに言われているのですが、そういう中で育って行って、小学校に入ると、スタートカリキュラムとかそういう配慮はされているのですが、やはり違ってくると思います。

保育園は職員の配置も、特別な支援が必要なお子さんがいればそこに1人入るとか、受け止める職員や先生がいます。小学校に行くと、35人を1人の先生が見ている。その環境はものすごく違うと思うのです。そこで、子どもたちも違和感があるのでないかと思います。そこがいろいろな登校渋りとか不登校とかにつながっていくのかなという面があります。確かに以前に比べると、その辺が目立ってきている傾向があるかなと思っています。

#### 事務局

事務局としては、この推進方針の限られたページの中で説明するのはなかなか難しいので、図とかを使っているところもあります。先生からおっしゃっていただいているとおり、遊びを通して学ぶという、幼稚園や保育園での幼児教育は、小学校の準備のための教育ではないですし、前倒しというものでないですよということをまず触れさせていただきました。

小学校に入ったら新しいカリキュラムや学科、単元が始まってくるのですが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見られる子どもたちの実態を踏まえながら、小学校での学習活動をやっていくところが必要だということを記載しています。

また、今ここでお話したことは、現在検討中の「架け橋期のプログラム」を作るに当たり、小学校、幼稚園、保育園の先生方にお話しいただいております。

#### 会長

ほかにご意見はいかがでしょう。

#### 委員

区民の方からのご意見があった（仮称）練馬区幼保小連携推進方針〔案〕11ページ「幼保小連携の全体イメージ」のところですか。実際の幼保小の連携をどのように練馬区として取り組んでいくのかというのが、これを見て、分かるイメージ図なのだろうと思いました。もう少し濃淡をつけたほうがいいのかと思います。例えば練馬区が目指す教育というのが、教育・子育て大綱である夢や目標を持ち困難を乗り越える力を備えた子どもたちの育成、これが大きな目標で、下が説明ですよ。ここは濃淡があつていいのかなというのがまず1点です。

次に、この表の真ん中に「段差に配慮し」とあります。この「段差」というのはそのまま使われるのかなという点と、今後、ねりま接続期プログラムというのを充実していきますよというのが架け橋のカリキュラムの辺りにあつたほうがいいのかと思いました。

また、下の「地域」と「行政」のところで、行政は、それぞれ「育児相談」は保健相談所が担っていますよという表記ですが、一方で、地域の方は、「子育て支援」という項目にはNPOやボランティア団体さんが関わっていますよという意味だと思います。そうすると、項目と活動している団体が並列に見える気がします。

会長

ほかにご意見はいかがでしょうか。

委員

練馬区幼保小連携推進方針〔案〕 11ページ「幼保小連携の全体イメージ」について、3分の1の下の部分の地域や行政の部分がとても強く出ていて、幼保小連携はもちろんそうなのですけれども、子育て支援とか教育そのもの全体のことに関わる、これだけの地域や行政がバックアップしていますよ、底から支えていますよという図に見えます。何か入れるにしてももう少し下げてください、10ページまでに書かれている、特に具体的な取組、6ページの幼保小連携推進に向けてこんなことをやっているというのが、研修会を教員同士が教育の質を充実させて共通にしていくとか、懇談会で具体的な就学に向けてのところの取組について幼児教育側と小学校側が具体的な生活の場面で情報交換をしているとか、就学相談に向けてという多様な育ちの子に対してこういう取組をしているとか入ると良いと思います。

それから、7ページ家庭教育の支援としてリーフレットの配布をやっているということが、もう少しこの真ん中の黄色から緑になっているところに具体的な幼保小連携の事業の取組として出たほうが、区が取り組んでいることの全体イメージが分かるのではないかと感じました。

会長

ほかにご意見はいかがですか。

委員

(仮称) 練馬区幼保小連携推進方針〔案〕 11ページ「幼保小連携の全体イメージ」の図の真ん中の矢印の下のところの「家庭」の位置づけが、一番大きくなっています。そこと地域と行政がどう関わるかということも含めてですが、「家庭」に何を求めるかというのは、それまでの説明の中には、支援の充実というのは書かれていますが、そこが伝わるのかなというのが、この図としては難しいなと思いました。この色の違いと、上の矢印の中に「家庭」が入ってしまっている部分というのが、見ていて分かりにくいと思いました。

事務局

今日、改めていろいろ具体的なご示唆なども頂きましたので、取り込めるところは取り込みたいと思います。例えば図面で少しバランスを変えとか、色味をつけるとか、言葉を入れるとか、そういった点は工夫できると思います。

会長

できる限りということで、事務局に一任をさせていただくということでよろしいですか。



(特に意見なし)

**会長**

いろいろご意見を頂きましてありがとうございました。この答申案は、9月中に策定をする予定です。委員の皆様にはご報告をさせていただきます。

では、案件(4)その他です。事務局、説明をお願いします。

**事務局**

現在、接続期プログラムの改定し、5歳児から1年生の2年間に焦点を当てた架け橋期プログラムとして、幼保小連携推進調査員連絡会作業部会にて作成を進めています。作業部会でまとまりましたら、調査員連絡会、こちらの協議会にご報告をさせていただきます。年度内に周知、配布できるよう進めています。

次回の協議会は、12月26日(火)午後3時から実施させていただきます。開催が近づきましたら、開催通知等々をご案内申し上げます。どうぞよろしく願いいたします。

**会長**

今回は、架け橋期プログラムについて案をお示しして、皆さんにご審議を頂きます。引き続きよろしく願いいたします。

令和5年度第1回の練馬区幼保小連携推進協議会を終了いたします。

(閉会)